水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年十月

1	いつの間に鬼の子のゐる柿もげば 擬人化が成功していると思います。隣に鬼の子がいるとびっくりですよね。楽しい景ですね。	璃土 佳月	展乎
2	独り居や陶狸と新酒酌み交はす 静かな夜です。	和永	森　佳月
3	鶏頭の畑を彩る二、三本 鶏頭の花の鮮やかな赤が際立つ句。	のり子	檜鼻ことは
4	金木犀手術の日にも薫ってる		宇田靖之
5	菱採りの田舟に背なの影動く		しーしー
6	コスモスや妻の誘ひに手を繋ぐ 団塊の世代微笑ましい光景。はにかみながら手を出す旦那さんの姿が目に浮かびます。「妻の誘い」が好き。出来れば誘いの仕草を詠んで欲しい。	文 暦 佳月 つぶ金	神谷たくみ
7	新米やみんなが揃い晩ごはん ほかほか御飯の食卓が嬉しい。これに勝るものなし。	里 霜 展乎	ありぎりす
8	漆黒のピアノが映す月今宵		新井のり子
9	養鶏家見上ぐる空を鳥渡る		河野凡士
10	鴫立て薄墨に暮る沢辺かな 墨絵を見てる様。西行の世界を想起させる。	文 暦 素風	破れ蓮
11	風鳴らし南京櫨の実が爆ぜり		光雲2
12	秋立つや間延びした影色淡し 秋の日の風景がぱっと目に浮かびます。	しみず	つぶきん
13	盆の月肴に父と差し向かい お父様との思い出ですね。	梗舟	春駒
14	ひそけさの藁の匂ひの刈田かな 五感を通して、収穫の後の寂しさや一年の苦労をねぎらうような、しみじみとした情感が伝わってくる。	荒一葉	ユキタ
15	静寂なる寺領に猛る鵙の声	光雲2	蝸牛

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年十月

16	ほつほつと十月桜風の中	まばらに、慎ましく咲く十月桜の情景が浮かびます。	しんい
17	青蜜柑たわわ枝の橋渡る風		真実
18	枯るかんな凛と立たるしたたかさ		しみず
19	野分来る人避難所へ避難所へ		ひろ志
20	人づての母の暮しや白桔梗	季語が印象的です。何があったのでしょうか？想像がふくらみます。白桔梗、お母様のイメージでしょうか。	荒一葉
21	うすら日の空のぬくもり鳥渡る	やさしい秋の風景。	くるみ
22	地蔵さまも茶碗に新酒よばれけり	茶碗酒とは頼もしいことです。リズムと言葉選びに秋の一コマが立ち上がり、有難さも感じる。ほのぼの、ほっこりの景が浮かぶ。	小林土璃
23	朝雀顔寄せ合ふて苅田かな		一駄歩
24	風騒ぎ頻りに背戸の木の実落つ		松田素風
25	桜紅葉ひとつふたつと散りにけり		かれん
26	秋雷や窓に湧く風生ぬるし		岩清水彩香
27	直に焼く皮のはじけて秋茄子		石井直子
28	名月やハンバーガーに目玉焼き	名月と言えば、ススキや月見饅頭が思い浮かぶのですが、ハンバーガーに目玉焼きとは。ユーモラスだと思いました。	平野楽
29	闇を浮く百葉箱や夜の秋	秋の夜の風景をうまく切り取っていると思いました。	岡本たか子
30	我老いて妻も老いゆく秋深む		高松和永

ことは

しみず
直子
和永

しみず

里香
彩夢
絵夢

順一

楽

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年十月

31		曼珠沙華女人荒野に咲き乱れ	癒香
32	光雲2 絵夢	御巣鷹のケルンに憩ふ秋茜 慰霊の心を、ケルンと秋茜に上手く託している。	新　暦文
33	のり子	海なし県空は大漁いわし雲 全く同じことを感じた経験あり。	霜里
34		ハロウィンの仮装映えたる秋薔薇や	総太郎
35	暦文	星彩が手を差し伸べる曼殊沙華 室生寺辺りに咲き乱れる曼珠沙華の画像が、、	岡崎梗舟
36	ひろ志 つぶ金	残菊や比叡颪は湖に散る 残菊と颪の取り合わせが好き。	大越マーガレット
37		柿なりももぎもせず時過ぎて行き	田頭西郷
38	ありぎりす	柿と栗小兵に軍配皿土俵 皿相撲の措辞に俳味あり。	絵夢
39		紅つける三つ身の女児や神の留守	秋谷風舎
40		くちばしの黄色い秋刀魚押してみる	森下山菜
41	しーしー	コスモスのゆらゆら風の軽さかな 明るいさわやかな風景。	龍野ひろし
42	ひろ志	帰燕空食後の薬仕分けつつ	高原ひろし
43		はらからの百寿の祝ひ栗おこわ	青木鶴城
44		岳友と秘湯にしづむ谿紅葉	渋谷きいち
45	ありぎりす	いつの間に鬼の子のゐる柿もげば 柿を挽いでいたらいつの間にか鬼の子がもういいかい、、、。	佐藤幹子

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年十月

46		秋高し嘗ては騎兵いま戦車	染谷風子
47		鉄塔の鵙は全身マイクロフォン	石川順一
48		うろこ雲立ちんぼうして次のバス	和田イチ子
49	直子 ことは 素風 順一	鶏頭や仏花のなかに収まりぬ 存在感をはなつ鶏頭が遠慮がちにおさまっているととらえたところが面白いと思いました。鶏頭は自己主張の強い花だと思いますが、他の花と調和し全体として良い姿の仏花となったのでしょう。季語が効いている。厳粛な気持ちとほっとしたような気持が混じっているような。	森　佳月
50		台風の過ぎて無音の青き空	檜鼻ことは
51	佳月 幹子	秋扇畳みて今日を仕舞ひけり 作者の日々を大切に凛として過ごされて居られる姿が想像できました。	展乎
52		転々と転ぶ紅葉箒草	しーしー
53	展乎 ことは	あの日別れたのも檸檬のせいでした 詩的飛躍がいい。とても印象的で、叙情に満ちた一句です。	神谷たくみ
54		長い夜見つけて楽し虫の声	宇田靖之
55		うつかりと欲ることならぬ花芙蓉	新井のり子
56		引揚桟橋ふと見上ぐれば渡り鳥	河野凡士
57	ひろし	台風の目なるや樹冠踊りやむ	ありぎりす
58		その先は修羅と知りつつ星流る	光雲2
59	ひろし	思い出す失恋さかなにひやおろし	つぶきん
60	楽 荒一葉 しーしー	日表の軒端に吊す柿簾 秋の風景をうまく切り取っていると思いました。情景が明確に伝わる。干柿の並んだ風景が見えるようです。	破れ蓮

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年十月

61		昼の灯や十月桜影うすく	しんい
62		筑後晴れ山苞なべて紅葉散る	ユキタ
63	龍野 素風	菰樽を開けて言祝ぐ新酒かな お祝いの新酒めでたし。新酒を祝う気持ちが伝わる。	蝸牛
64	和永 ひろ志	うたた寝の兄父に似し盆の月 DNAの力ですか。亡父の新盆の接客に疲れたのだろう、月の射す部屋にうたた寝する兄の寝姿は父にそっくりである。	春駒
65	彩香	さやけしやインクのにほふ定期券 感覚的、実態のない「さやけし」の季語を使った二句一章、実態そのものの定期券から嗅覚、真新しい印字に視覚、高揚感まで刺激する。	しみず
66		秋の雨調の宇宙でボール蹴る ありましたね、こんな光景。	真実
67	展乎 龍野	切り分けて端取る母の西瓜かな	荒一葉
68	土璃	黄せきれい橋を叩いてすみだ川 よく分かる景です。中七が効いていると思います。	ひろ志
69		秋うらどんぐり好きの神馬肥ゆ	小林土璃
70		街角の軌道を曲がる秋の暮	一駄歩
71	直子 土璃	ひしめいて牧の羊の露まみれ くりくりした羊たちの様子が目にうかびました。景がよく見えます。「露まみれ」がいいですね。	くるみ
72	梗舟 光雲2	残照に色の透けゆく草紅葉 中七がよい。	かれん
73	龍野	前足の高き神馬や秋の雲	岩清水彩香
74		秋高し富士に掛れる雲もなく	松田素風
75		名月やロケット飛ばし逢ひに行く	平野楽

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年十月

76		爽やかにインコは朱色極めたり	岡本たか子
77		椎の実の落つる要塞跡地かな	石井直子
78	つぶ金	軒下の未だふくよかに吊し柿 「ふくよか」の季節感が好き。。	癒香
79	のり子	ぬれ煎を孫と分け合ふ秋日和 柔らかいぬれ煎だからこそ。	新　暦文
80		桜葉の紅葉して散る輪廻かな	高松和永
81	絵夢	秋深し娘と閉づる家の墓 中七の切なさが季語とマッチしている。	総太郎
82	霜里 しーしー 幹子	終電の最後の客に今日の月 暗い駅と明るい月、目に浮かびます。ガランとした駅を照らす月です。「最後の客」という表現がお上手。村人が楽しみに大勢集まったことでしょう。三味線の音が聞こえて来ます。	岡崎梗舟
83	ありぎりす	取り返せぬ一言ありや百舌鳥の声	霜里
84		孫拾い紅葉手のひら広げ見せ	田頭西郷
85	楽	天高し喫水深し澪迅し リズムがいい、巧いと思いました。	絵夢
86		秋さぶや列車遅延のアナウンス	大越マーガレット
87	ひろし 彩香 幹子	裏山へ三味の音消ゆる村歌舞伎 秋の収穫を称え合い、労い合う一時の娯楽が三味の音が色づき始めた裏山に響く、ゆったりとした時間の流れを感じます。	森下山菜
88		筑波嶺も朝日も一目秋日和	秋谷風舎
89		茸山に目敏き妻のひそか声	高原ひろし
90	荒一葉 梗舟	街の灯が手招きをする夜寒かな 街の灯の温かさと夜寒の冷たさの対比によって、心象風景が浮かび来る。ちょっと一杯ですね。	青木鶴城

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年十月

91
潔く生きたる母よ草の花
龍野ひろし

92
秋ともし向田邦子のあ・うん読む
佐藤幹子

93
新走りさらに進むや物忘れ
染谷風子

94
順一
朴落葉暮れて仮面の吾子帰宅
比喩的な意味の仮面。仮面浪人や、気持ちが読めぬと言う意味での仮面か、分かりませんが、伝わるものがありました。
渋谷きいち

95
雑菊の風に匂うや老いの庭
和田イチ子

96
大理石小鳥が三羽四羽五羽
石川順一

97

98

99

100

101

102

103

104

105